

# ぽたいたい!

源流のひとしづく

## ぽたいたい

源流のひとしづく

夏  
第11号

発行所 ■ 財団法人吉野川紀の川源流物語 森と水の源流館  
発行日 ■ 平成18年8月発行  
TEL 0746・52・0888

### CONTENTS

- コラム
- 第7回 源流学講座
- 源流の主役たち
- 川上村見聞録⑧
- 吉野川・紀の川流域の遺跡 その2
- 源流人会活動報告
- 交流のページ

### 森と水の源流館

住所 奈良県吉野郡川上村宮の平  
財団法人吉野川紀の川源流物語  
TEL 0746・52・0888  
FAX 0746・52・0388  
URL <http://www.genryuu.or.jp>  
E-mail [morimizu@genryuu.or.jp](mailto:morimizu@genryuu.or.jp)

## 源流人会活動報告

5月20(土)

### 源流学の森づくり

源流の番屋のトイレなど水回りの整備。まずは午前中少しだけ研いでない刃物で杉の皮むきなどをしてみる。お昼ご飯はいろいろを囲んで、四方山話に花が咲く。トイレづくりと達っちゃんの刃物の研ぎ方講座。でもなかなか達っちゃんほどは研げません。達っちゃん曰く「50年以上研いどるからな。素人さんにまねされたらプロやめなあかな。」納得!



▲ 皮むき作業



▲ 達っちゃんの研ぎ方教室

## 源流学の森づくり

5月21(日)

この日は、森の名手名人100人杉本充さんを講師に迎えての間伐教室。40年生ほどの杉、檜、そして、なんととっても吉野材を切り倒してきました。切り倒した材は皮をむいて、乾燥させます。そして、はいだ檜の皮で、杉の皮むき入れ(小刀のさやのようなもの)で作成。根付けまで作って本格的。檜の皮つてこんなものにも使えるんだ。しかし、なんといっても、印象的だったのは杉本さんの一言「何しろ、安全が第一です」。間伐指導している間にも何度も何度も繰り返していました。長年林業に携わってきたからこそその重みを感じる一言でした。



▲ 皮むきケース



▲ 間伐教室

## 交遊のページ

「苔がいつはいあるところに行つてこないか。」

苔が大好きな私にとって、連れ合いと出かけた川上村源流の森探索はすばらしい経験でした。車を降りるとヒュルヒュルというカジカガエルの声。日本で5ヶ所しかないというトガサワラの木々。優雅なヤマフジ。白い小さなウツギ、ミヤコハコベ、黄色のへび、イチゴ、本当に小さなヒナセントウソウ、清楚なユリワサビ、丸い葉が赤いアカメガシワ、プロペラがついたカエデの葉、緑が内側に巻いているツクバネガシの葉、ウラジロガシの若葉うすくてあかあかしている。沢沿いには、太平洋側の温かいところに多いシオジ、北日本寒いところに多いトチノキがいつしよにあるフシギ。芽を出しかけている直径3cmくらいの黒い丸い玉はトチの実だ。土の中から顔を出している木の赤ちゃんたちを踏まないように歩く。

飲みものは、そう、源流のしづくを集めた川の水。おいしい、おいしい。そして多種多様な豊かな苔の感触。すてきな1日を本当にありがとうございました。

会員No.173「杉子さん」より



## 源流人会募集中!

源流人とはかけがえのない水を生かす源流の自然を愛し、源流を守り、育てる人です。

源流人会とは集い、話し、遊び、学び、考え、触れ、交流し、参加し、喜びを分かち合いながら、源流を守り育ててゆこうとする会です。

ともに源流学を楽しみ学ぶ仲間を紹介ください



年会費	個人	2,000円
	家族	3,000円
	学生	1,500円
	団体	10,000円

郵便振替 00940-1-331163

### 募金は次のような活動にあてられます

- 吉野川・紀の川の水について学ぶ副読本を作成し、流域の小学4年生に配布
- 「源流学の森づくり」事業
- 「水源地の森」の保全を呼びかけるための啓発用看板の製作と設置

郵便振替

00950-2-331164 「水源地の森守募金」あて



# 吉野川・紀の川流域の遺跡～その2～

歴史担当の成瀬匡章が、吉野川・紀の川流域の遺跡について紹介します。

## 「吉野の中世城館 吉野町山口城跡」

吉野郡内にも城跡があるのをご存知ですか。『日本城郭大系』には吉野郡（旧大塔村・西吉野村を含む）に29箇所の城跡があることが記されています（実はもっとあります）。

さて、城というと姫路城や大阪城のような石垣と天守閣をイメージされると思います。奈良県内では日本100名城にも選ばれた高取城跡（高市郡高取町）などがそれに当たりますが、全国に約3万あるといわれる城の多くには、石垣も天守閣もありません。今回紹介する山口城はそんな城のひとつです。

川上村の隣、吉野町の竜門岳南麓は、かつて竜門郷と呼ばれていた地域です。竜門郷内には奈良時代の山岳寺院（竜門寺跡）や式内社（吉野山口神社）があり、中世には多武峯寺（現 談山神社）の領地になっていました。その地域の中ほどにあるピラミッド型の山の頂上に山口城跡があります。

山口城跡はそれほど大きな城ではありませんが遺構は良好に残っています。頂上部には平坦地（主郭部）があり、尾根には深い堀切（尾根を遮断する溝）、そして斜面には畝状堅堀群（連続堅堀）を観察することができます。畝状堅堀群とは戦国時代の半ば過ぎごろ（16世紀後半）に開発された技術で、斜面に畝状の溝を掘り、登ってくる敵を上から狙い撃ちできるように作った仕掛けです。吉野郡内では現在のところ2例しか知られていない遺構です。

さて、この城は誰が何のために築いたのでしょうか？

普通、城を築くのは領主（ここでは多武峯寺）クラスの人ですが、最近の研究によって地元の人たちが避難場所として築いたものがあることがわかってきました。

ちょうど山口城跡が築かれた時期の古文書が竜門郷の旧家に残されています。この古文書は村人が戦いに参加する際の掟書で（上田家文書「集議掟書案」）、竜門郷の人たちと関係が深かった吉野町飯貝の本善寺が、織田信長の命を受けた筒井順慶（「元の木阿弥」とか「洞ヶ峠」などの諺の元になった武将です）に焼き払われるという事件がきっかけとなって、村の自衛のために決めたと考えられています。

この掟書には城についての記述はありませんが、ひょっとすると、山口城跡も村人が自分たちの村を守るために築いたものかも知れません。

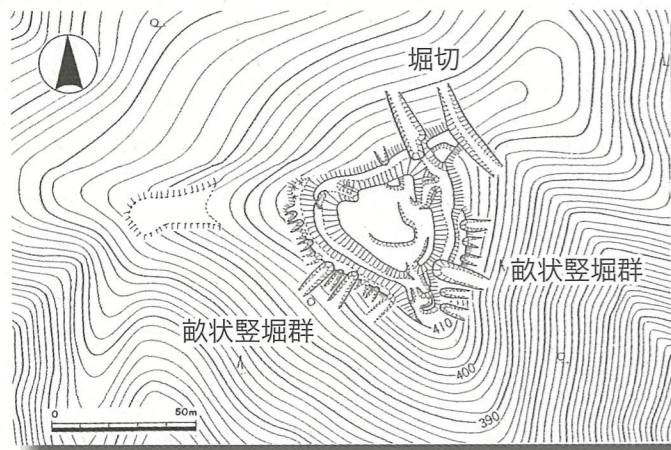


図2 山口城跡略測図（作図 成瀬匡章）

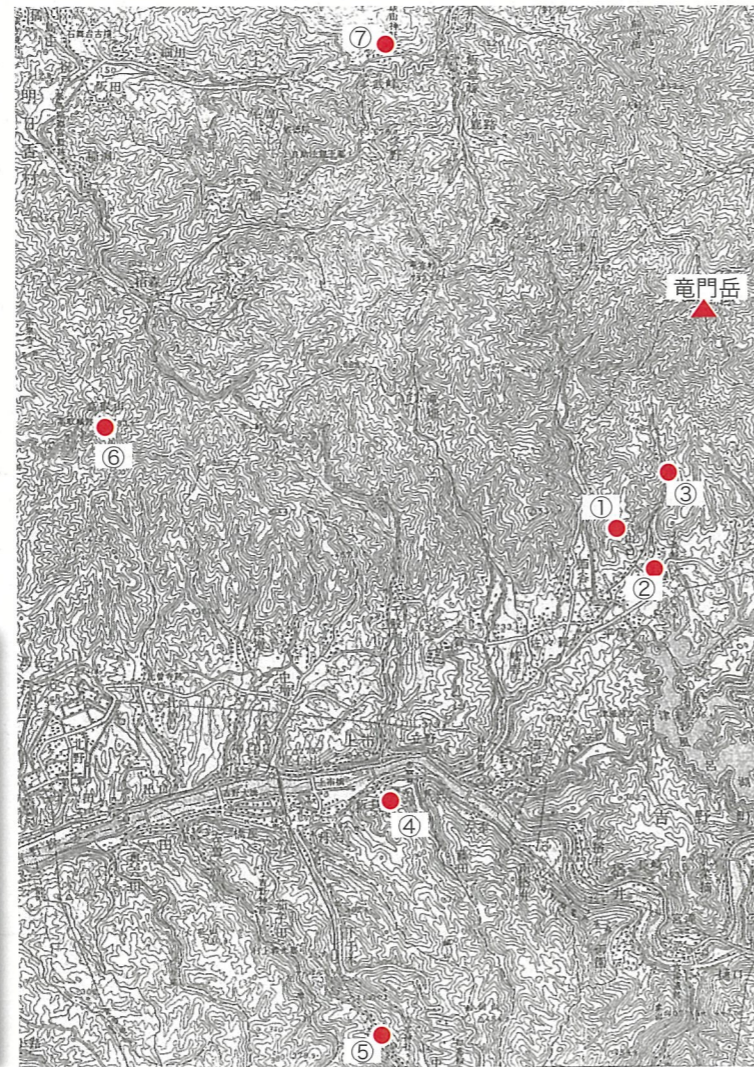


図1 遺跡位置図

- ①山口城跡
- ②吉野山口神社
- ③竜門寺跡
- ④本善寺
- ⑤金峯山寺（蔵王堂）
- ⑥高取城跡
- ⑦多武峯寺（現 談山神社）

国土地理院 吉野山 1/50000 を改変

参考文献  
 朝倉 弘 1993. 奈良県史 11 大和武士. 名著出版, 東京.  
 村田修三・山本秀雄 1980. 『日本城郭大系 第10 三重・奈良・和歌山』. 新人物往来社, 東京.  
 成瀬匡章 2004. 吉野町山口城跡の調査. 青陵 111: 10 - 12. 橿原考古学研究所集報.  
 吉野町教育委員会（編）2004. 奈良県吉野郡吉野町上田家文書調査報告書.

# 吉野川 ウナギ釣り



ぼたりの原稿を書けといわれて、はたと困った。時間もなくなりパソコンに向かったとき、何年前になるのか雑文を書いたの思い出し、それを載せることにしました。

花鉢の台にしている板を新しいものにとりかえるために、持ち上げひっくり返したところ大きなミミズが3匹出てきた。木が腐ったこと、毎日花に水をやるために湿気がありミミズにとっても快適な住みかであったのか。「ウナギのえさにええんとちやう。」という声に「取つとこ」と入れ物にまず3匹を入れた。後の木をひっくり返してまた3匹を追加。

間が経ってしまい、行きそびれたが様子を伺いと、庭での焼肉バーベキューをするために呼びに行くことで川へ向かった。

2匹の鮎を釣った二人と出会い、自分が思っていた場所を教え、あと1時間したら帰るように行つて、自分は帰つてバーベキューの用意に取り掛かった。間もなく二人も帰り、皆で食事をした。ビールを飲んで気分も良くなり、長男に「帰るの遅なつてもええんか」と聞くと「うん」というので

「ウナギ釣りに行くか」  
 「いい、ミミズあるんけ」  
 「畑でもうちよつと取れよ」  
 と言つて、二人できゅうりの根元に乾燥を防ぐために敷いている藁を持ち上げてミミズを10匹あまり取り、えさは用意した。

「針あるんけ」  
 「ない」  
 「買うてくるわ、お金くれ」  
 自分はバーベキューの後片付けをする間に長男が竿などの準備をする。

三男も釣りに行きたいものの、「テスト中やから：後から見に行くわ」と残つた。

「どこへ行く」  
 「今日行つた北塩谷の場所がええと思うわ」  
 「ほんだらそこへ行く」  
 まだ少し明るい間に、着いたために針をつけるのなんとか電池を点けずにできた。

第一投を投げ込み、座つてあたりを待たせ。

長男は、2本の竿を持ってきたため忙しく2箇所を攻めた。

直ぐに自分の竿先が揺れた、ウナギ釣りではウグイやギギ、カワムツなどがよく釣れるため、「ウグイか」と思いつつ、リールを巻き始めた。「少し重いな、おおいウグイか」と思った瞬間

「ウナギや、ウナギや」  
 「おお、ウナギや」  
 一気に持ち上げ、長男が網で受けた。

「おおいな」  
 「まあまあやな」  
 「けつこう大きいで」  
 と魚籠（びく）に入れた。

気分は良い。

あまりうれしそうにもしないで、第2投の準備に掛かった。

長男は、忙しそうに、2本の竿をあつちへこつちへと投げつけては鈴の音を聞いては「うなぎか」と言いながら巻き上げるが、ウグイばかりが釣れて来る。

長い間、自分の竿には当りがこない。えさがとられているかも知れないので、上げてみることにした。

重い、引つかかっているようだが、力を入れて引くと外れたのか巻き上げられるようになったが、何か掛かっているようだ。「ウナギや、ウナギや」長男の声に慌てて陸の方へと巻き上げた。

今度は少し小ぶりだ。

それから、10時ごろまでは掛かってもウグイやカワムツで、風もでてきたので帰ることにした。

家に着くと、  
 「わーおおいそうや、大きいね。おじいちゃんにも言うてつたり。」と大変な喜びようで、早速料理にとりかかった。

きゅうりの葉っぱを取り、きりを用意し、ウグイの葉っぱを取り、きりを用意し、氷についたらウナギが暴れへんから料理しやすいらしいど。」と水を用意させ、

「わあええウナギやなあ、どこで釣ったんで」  
 「はよ、きゅうりの葉っぱとつて来たり」  
 水につけるとおとなしくなった。

小刀で、頭の後ろから切り始めるがうまく切れない。四苦八苦しながら小さな方のウナギを切っていると、おじいさんも見に来た。

「寝られへんだんけ」  
 「そら見とかな寝られへんがよ」  
 長い時間をかけてようやく料理した。

「大きい方は、おまえやつてみ」と言いながら、小刀をときに行つた。

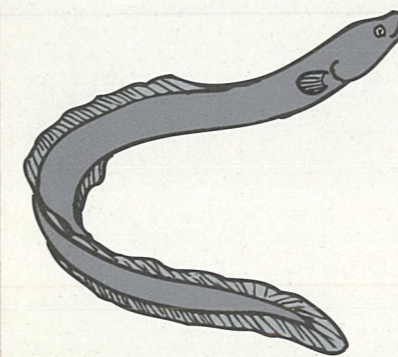
長男は手早く料理した。

騒動はようやく終わりを告げて、11時を回つて眠りについたら。

明日は、うな丼。

その後、2回釣りに出かけたが、2匹づつ釣り上げることができた。

絶好調のウナギ釣りのお話でした。つづく…。



（坂口泰一）

# 川上村見聞録 8

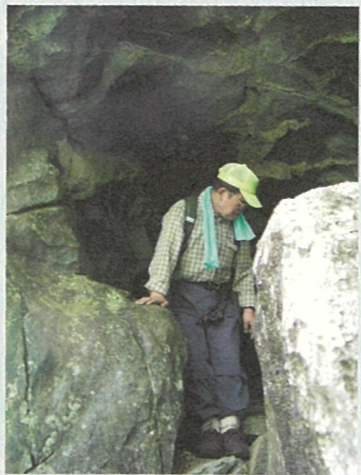
\*このコーナーでは、民俗担当の黄瀬桂子が村で見たこと聞いたことを「川上村見聞録」として紹介していきます。

## 「東熊野街道①」

奥吉野川上村に連なる山中では、古来からの東熊野街道が今も“現役”で使われています。この東熊野街道は、吉野と熊野を結び、さまざまな歴史を育んできました。

川上村の人が「海にいるより陸にいる方が長い」と表現するほど塩辛い鯖や鮭、サイラ（サンマ）などの“海のもの”がもたらされた昔からの最重要物流ルートであり、また大峯山の修験者たちや、後南朝の悲運の皇子たち、明治という時代を切り開く魁となった天誅組の志士たちが駆け抜けた歴史ロマンのルートでもあります。

7/9には、民俗講演会第12回いろいろばた教室「東熊野街道ウォーク」を開催しました。そのときの資料より、川上村の東熊野街道にまつわるエピソードをご紹介します。



▲ 小川らが潜んだ天誅の窟

## ●東熊野街道と天誅組のはなし

ペリーの黒船来航に慌てふためく江戸幕府を睨目に、尊皇攘夷の機運が高まってきた頃のおはなし。

ときは江戸末期、明治維新が成るちょうど5年前、ところは五條市、西吉野村、大塔村、高取町、御所市、下市町、大淀町、十津川村、下北山村、上北山村、川上村、東吉野村の奈良東南部一帯、政変により一夜にして英雄から賊におとしめられた志士団があった。（\*旧市町村名で表記）

孝明天皇が、表向きは神武天皇陵・春日大社参拝を口実に、兵力確保のため大和へ出向くとの計画が、攘夷派により持ち上がり、その魁として中山忠光（明治天皇の叔父）を中心とする天誅組の志士が、当時幕府直轄地であった五條代官所を襲撃した。ところが政変により攘夷派が破れ、現場の天誅組は賊に急転落。あとに残った志士たちは持久戦に持ち込むべく高取城を襲撃するも撃退され、総裁の吉村虎太郎などは味方の鉄砲に当たって負傷するなどの負け戦。1万の追討軍に追われ吉野の山中を逃げ惑うことに。

十津川村から大峯山脈を横断し下北・上北山村から東熊野街道難所の伯母峯峠を越え、川上村伯母谷集落へ。標高の高い大峯山脈を横断中に高熱を発症した久留米藩出身の小川佐吉らは、伯母谷にたどり着いたもののダウン。伯母谷と上谷の集落で地元の篤志にかくまわれた。



▲ 東熊野街道をゆく

伯母谷の人々は、なかなか回復しない小川を「大塔さん」（\*1）の洞窟に軍医の乾十郎とともにかくまっていた。追討軍の目を避けて、命がけで食料や水、薬などを運ぶ伯母谷の人の介抱の甲斐あって、一命を取り留めた小川。しかしすでに東熊野街道を進んで武木から東吉野村に入った他の志士らは討伐軍と戦い壊滅していた。

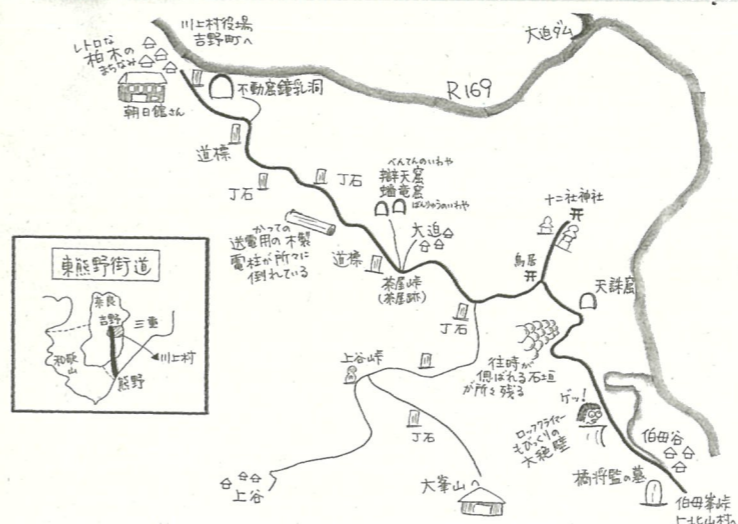
明治維新が成るのは5年後。あと少し時流が味方すれば・・・政変がなければ・・・志士らが生き残れば、新政府樹立の英雄になれたに違いない。英雄たちは、あまりにも早く時代を駆け抜けた。

東熊野街道には、そんな切ない天誅組のはなしが語り継がれている。

【小川佐吉のその後】一命を取りとめた後、長州に逃れた。血気盛んな小川は禁門の変などにも参加、その後長州藩遊撃隊長として伏見の戦いに出撃するも負傷し没した。

【乾十郎のその後】楠本燈庵と名を変え大坂で町医を開業していたが、捕えられ、京都六角獄舎に入れられた後、処刑された。

（\*1）「大塔さん」・・・信仰の対象として巨石が祀られていた。



# 源流学講座



川上生まれ川上育ちの達っちゃん（辻谷達雄館長）は、50年以上の山仕事のベテラン。その長い人生の経験から、自然とともに生きる力や知恵などを笑いのエッセンスを加えてお届けします。

## 第七回 山小屋づくり

10月3日（曇り後小雨）、小屋の棟木もおさまったので、今日はいよいよ屋根葺き作業に入る。この作業はかなり、技術を求められる作業である。失敗をすれば、小屋の中に雨水が入ることになるので、手慣れた山仕事のプロに2人来てもらった。

まず、一番目に垂木を取り付ける。棟木より桁に渡して止めていく。この場合、垂木と垂木の間隔を決めることが、大事である。高い所へ登って作業するので、高所恐怖症の人はダメである。表裏、垂木を打ち終わると今度はその上に小舞といって、幅4.5cm、厚さ2.1cm、長さ4mの材を30cm位の間隔で垂木に打ち付ける。その上に波トタン板を留めていく。そのとき、所々に明かりが小屋の中に入るよう、ビニール波板を打っておく。ちなみに、本来の山小屋の屋根は杉皮で葺いていた。昔は山で切り出した杉の皮を使ったので、タダで手に入れた。買うにしても坪当たりで日当より安かったものだが、現在はものすごく高くなった。この山小屋の屋根を葺くのに材料費を計算すると50万円はかかってしまう勘定になる。従って、予算の関係上、波トタンで屋根を葺いた。屋根はその日一日で葺きあがる。

次は棟木の真ん中に煙抜きを取り付け

る。煙突がないので、（いろいろの）煙がスムーズに部屋から抜け出るように作る。これで、雨水が落ちてくる心配は無くなったので、外壁を張る。奥の半分は波トタンで張り、残りは丸太を真二つに割った一見ログハウスのような壁に設計する。壁打ちは大変手間のかかる作業なので、源流人会の人たちにも関わってもらう。長さ1m余り、末口12cm位の丸太を真二つに割る作業は、慣れると何でもない作業であるが、初めての人には大変みたいだったので、「木は元の方からクサビを入れ、割っていく」、「竹は末の方から割っていく」のが基本と一言アドバイスした。「木本・竹末」と覚えておくと良い。但し、全部きれいに真二つに割れるとは限らない。よじれて割れる方が多いので修正する。出来上がると柱と柱の間に釘で打ち付ける。壁を打つ前に入口と窓の位置を定めておく。入口は三ヶ所作った。表の正面はちよつと拘って、杉皮を張った扉を取り付ける。勝手口として、出入りの利便性を考慮して、上（山側）、下（川側）の二つの両トモ入口を作る（トモとは表桁と裏桁を結ぶ梁と棟木との間にできる三角になった部分）。昔の山小屋の入口は二つのトモ入口で、小屋の中は真ん中が土間で、通り抜けられるようになっていた。そして、土間の両側に床を揚げて、その上に藁を敷いて、その上に布団を掛けて寝たものだ。寒いときは土間の真ん中に一晚中火を炊いていたので、煙の匂いが体の中にまで染みこんで、家に帰るとしばらく煙



▲ 煙抜き出来上がり



▲ 屋根の骨組みの様子



▲ 壁の様子



▲ トタン板を止めている様子



▲ 窓のできあがり



▲ 杉皮を張った扉



▲ 丸太を割っている様子

# 第2回 源流の主要たち



## 森の動物たちは浮気性？



森林総合研究所関西支所 大西 尚樹  
(☆通称なおきち。源流人会会員。)

源流の森にはたくさんのほ乳類が住んでいます。代表的なものとしてシカやツキノフグマなどがすぐに思い当たるでしょう。しかし、今回は小さい上夜行性のためほとんど目にする事が出来ない野ネズミの意外な行動に目を向けてみましょう。

その名はヒメネズミ。

その名前の通り、とても小さなネズミです。体重は15g前後。大きさは写真を見ての通り、手のひらサイズです。日本の森林に住むネズミの中では一番身体が小さい彼らの行動にはちょっとした特徴があります。それは一夫一妻という婚姻形態をもつといわれていることです。

えっ？と思われた方、そうです。私たちは(法律上)一夫一妻制ですが、実はほ乳類の約95%が一夫多妻だと言われているのです。

ほ乳類は母親が母乳を与えて子供を育てるわけですから、外敵に襲われない安全な巣と健康な母親がいれば、父親がいなくても子供は育ちます。そのため、雄は1頭の雌の育児を手伝うことよりも、自分の子孫を数多く残すために複数の雌と交尾しようとする。その結果ほ乳類の多くは一頭の雄が複数の雌と交尾をするようになるのです。

では、そのヒメネズミは本当に一夫一妻なのでしょうか。そんなことに疑問を持ち、1年間札幌市郊外の森の中で彼らの行動を追いかけてみました。

この図-1はある年の秋(9月)の行動圏を示しています。確認された12頭(雄5頭、雌7頭)のうち、行動圏が重なっている、または接しているペアは5組確認できました。この行動圏の結果からだけなら、これまで考えられてきたとおり一夫一妻と言えるかもしれません。ちなみに、ここでは繁殖は主に春と秋の2回行われており、春は全て前年に生まれた個体でしたが、秋にはその年の春に生まれた個体も繁殖に参加していました。

しかし、DNA(遺伝子)情報を用いた親子推定から、意外な結果が見えてきました。まず、図の右上にF11という雌がm26という雄とペアを組んでいます。また、右側にはM11とf21というペアも見えます。この2組のうち前者のペアが1頭の子供の親となっていたことがDNA判定により確認されています。しかし、春に生まれたある3頭の兄弟の両親はDNA判定によりM11とF11であることがわかりました。つまり、このM11とF11は春にはペアを組んでいたのに、秋になるとそれぞれ別の相手とペアを組んでいたわけです。

DNA判定はもう一つ面白い結果を導き出しました。図中央にM12とf23というペアがいます。10月に初めて捕まった個体がDNA判定からこのペアの子であることがわかりました。しかし、このペアと隣接した行動圏を持つ“独り身”のf22もM12の子供を産んでいたことがわかったのです。



▲ ナガレヒキガエルとなおきち

このM12とf22は行動圏が重なっていないことから、“ちょっとした浮気”と呼べそうですが、これは一夫多妻の動かめ証拠となりました。

筑波や三重で行動圏を調査した報告では、雄と雌の行動圏が重なり合う一夫一妻的なパターンがみられていますが、三重では一頭の雄の行動圏が複数の雌の行動圏と重なる一夫多妻的なパターンが観察されています。このことから、ヒメネズミの繁殖システムは「一夫一妻」と決定づけられているのではなく、地域によって違いがあるようです。ヒメネズミと類縁のモリアカネズミはイギリスの個体群では一夫一妻と報告されていますが、ウクライナ北部の個体群では一腹子(例えば五つ子など)でも父親が異なっているという「一妻多夫」または「乱婚」が報告されています。

このように繁殖は種によって固定されたシステムではなく、地域や個体によっても異なってくるのかもしれませんが、どうしてそのような違いが生じてくるのでしょうか？資源量や個体数密度などによるのではないかと考えられていますが、その解明にはまだ時間がかかりそうです。

さて、源流の森に住んでいるヒメネズミたちは、一夫一妻なのでしょうか？それとも・・・



写真-1 ヒメネズミ (*Apodemus argenteus*)。日本の多くの森林に分布しているが、世界では日本にしか生息していない「固有種」です。頭からお尻まで10cm以下で、身体と同じくらいの長さのしっぽを上手に使う木に登り、樹上に巣を作るものもいます。雑食で草・堅果(ドングリ)・虫などあらゆるものを食べます。



写真-2 ブリキで出来たこのワナに、エン麦を入れて木の根本などにかけておきます。夕方仕掛けて、早朝に見回ります。ネズミが入っていたら、個体番号を確認して、体重・繁殖状況(妊娠しているか、授乳しているか等)を調べて、その場に放します。これを2週に1回くらいのペースで行います(注:捕獲には県の捕獲許可が必要です)。

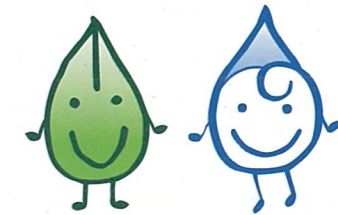
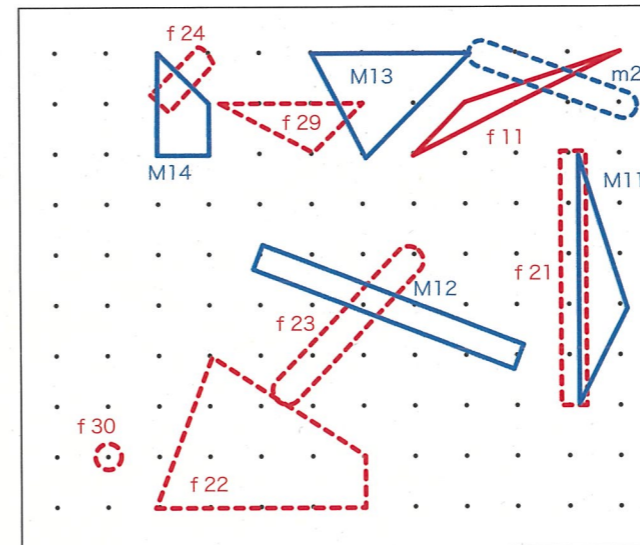


図-1 9月の各捕獲個体の行動圏。黒点:ワナの設置場所(各10m間隔)。アルファベットと数字は個体番号を示し、M、mは雄(male)、F、fは雌(female)を意味しています。アルファベットが大文字および行動圏が実線の場合は前年生まれ、アルファベットが小文字および行動圏が点線の場合はその年に生まれた個体を意味しています。